

私の戦争体験 第37集

おじいさんや
おばあさんが
体験した
大切な大切な
お話の数々。

巻頭特集

戦争の実情を知り、伝えていくために
～いまの私たちができること～

大阪大空襲にあつて p4

私の戦争体験 p5

堺大空襲の火中を逃げて p6

私の戦争体験 p7

不発弾で命拾い p8

一杯の牛乳 p11

学徒動員の思い出 p12

戦時の兄の思い出 p14

戦時教育と食糧難時代の銃後の少女 p16

平和のありがたさをかみしめる p18

小学3年生集団疎開 p19

もう戦争はいやです p20

[メッセージ]「子ども達も、若者も考えよう! 殺す殺される日本でいいですか?」 p22

お聞かせください! あなたの〈声〉 p23

〈終戦70年記念号〉

2015

親子で学ぶ平和学習資料

5 あなたの住まいの地域で「戦争体験を語り継ぐ会」が開催されれば、参加したいと思いますか? (イ) はい (ロ) いいえ

6 戦争体験者は、高齢となり自分で書かれるのは、困難な方も多いと聞きます。あなたは、そのみなさまの戦争体験を聞いて、原稿を書くボランティアがあれば、参加したいと思いますか? (イ) はい (ロ) いいえ

7 あなたのほかに「私の戦争体験」を読まれた方はおられますか?

(イ) いる (ロ) いない

●それはどなたですか? (イ) 配偶者 (ロ) 子ども (ハ) 孫 (ニ) 友人 (ホ) その他
読まれた方の感想があればお聞かせください。

8 「私の戦争体験」〈第37集〉をお読みになってのご感想をお聞かせください。

9 最近、平和について考えたことを教えてください。

●これを読んでくれた子どもたちにお聞きします

10 お父さんやお母さん、おじいちゃんやおばあちゃんから戦争体験を聞いたことがありますか。 (イ) ある (ロ) ない

11 「ある」とお答えの方にお聞きします。聞いた体験談をご家族やお友だちに話したことがありますか。 (イ) ある (ロ) ない

ご協力ありがとうございました。

大阪いずみ市民生活協同組合

大阪大空襲にあつて

八尾市 安部 睦子(93歳)

私は生協にお世話になつてゐる組合員でございます。私は大正生まれ当年で93歳となりました。私達の年代は女学校3年生頃から戦争を感じ、白衣を縫つたり、傷ついた兵隊さんの慰問に行つたり、慰問袋を送つたり、戦が激しくなると、勝つまでは一致団結で食べる物もなく、空腹の口々でした。多くの若い男女は大変。男性は戦地へ、女性は食・衣に困り、毎日来るB29の攻撃を受けた大阪は焼け、大阪駅前など死者が重なつていました。まさに地獄の絵を見ているようです。

私自身京橋で敵機来襲に会い、やつこの思いで鶴橋まで来たら、電車が動かず逃げろと言われ、鶴橋の地上で防空壕に入り大丈夫と思つていたら、地上は火の海。偶然同じ所でいた男性から「逃げよう。火を見たら女性は狂うから、しっかりして」と教えられ、出たら火の海。B29が爆撃焼夷弾を落とし一歩も進めない。その時もう1人の女性が今里に行くといわれ、3人で火のない方向に煙の中を男性の指示で逃げましたら、もう1人の女性は今里は焼けていると火の中に進まれるので、2人で行かないでと言つてゐるのに火の中に入つて行かれました。女性はすでに気をなくされていたと思ひます。それから私達は布施に来ましたら火の海、衣類も熱くなり火の海の中では水をかぶれと教えられ、水をかぶつて火の中を歩きわが家に着いたのは夜の1時頃。電車が動かかないため、懸命に家に着きたいと見知らぬ男性を頼りに帰宅しました。その男性は奈良県の方で電車が動くまでわが家の母がない米を使つて食事をしてもらいました。私にとつては命の恩人と思ひ、今も感謝してゐます。

都会人の私達は食糧もなくヤミ米も買えない、金も通用しない物々交換のため、持つていた着物など食べ物に変え、最後は馬などに与えられるような物を食べ命をつなぎました。最終はヤミ市には珍しい物を売つてゐる。しかし金はない。法律はきびしい法律を作り、ヤミ米を買えない。裁判官が法を守つて死亡されました。私達の年代の多くの人々の尊い命をなくされました。現在生き残り人の命をなくす戦争はどのような理由であつてもしてはいけないことを声を大にして戦争を知らない方に伝えたいとペンをとりました。毎日平和をと老人は祈り続けてゐます。

私の戦争体験

堺市 西川 美智子(75歳)

私は今年75歳になりました。光陰矢のごとしと言ひますが、月日の経つのは早いもので、気持ちは若くても体力の限界を感じる今日この頃です。

さて、私は、大阪梅田阪急百貨店のそばで生まれました。前は原っぱで兄2人がキャッチボールをして遊んでた平和な時代。誰が戦争で運命を狂わされると想像したでしょうか。大阪空襲で、あの辺は火の海となり命からがら母の里の門真市(当時は村)へ疎開しました。段々戦争も激しくなり、父は庭に大きな防空壕を掘りました。空襲警報のサイレンが鳴りB29の飛行機の轟音がしてくると、家族中が防空壕に逃げ込みました。或る日、凄じ地響きがついて家中のガラスが割れ、家もつぶれたんじゃないかと思ふ様なショックを受け、後から村中の人が見に行くと、焼夷弾が落とされ、田んぼに2つ大きな池が出来ました。もう少しのところで、家族全滅するところでした。昭和20年4月、今度は父の郷里である奈良県五條市の田舎へ疎開しました。姉は女学生でしたが、軍需工場で働いていたため、祖父母と共に門真に残りました。世話になつた親族の人達も今や亡くなり、従妹と年に一度は逢い當時を懐かしんでゐます。

父は大工だったので、広い家を建て生涯をこの地でと思つたのでしよう。昭和22年牧野村

慰問
辛(つら)い境遇(きようぐう)の人や、災害(さいがい)・病氣(びやうき)で苦しんでいる人などを見舞(みま)うこと。戦争中、兵士などを慰(なぐさ)め、士氣(しき)を鼓舞(こぶ)するために兵士のもとへ行つてゐた。

敵機来襲
敵の飛行機などが来て、襲(おそ)い、攻(せ)めてくること。

防空壕
敵の航空機の攻撃から避難(ひなん)するために地下につくられた穴(あな)や施設(しせつ)のこと。

爆撃焼夷弾
敵の建造物(けんぞうぶつ)や陣地(じんち)などを焼き払うために使用される爆弾(ばくだん)や砲弾(ぱうだん)。中に入つては焼夷剤(しょういざい)が燃焼(ねんしょう)することで対象物(たいしょうぶつ)を火災(かさい)に追い込むのが目的。木造(もくぞう)の日本家屋(にほんかおく)を効率(こうりつ)よく焼き払うために使われた。

光陰矢のごとし
月日(つきひ)の過(す)ぎるのは、矢(や)が飛んで行くように早いといふたとえ。

大阪空襲
1945年3月から8月にかけて8回行なわれたアメリカ軍による大阪市を中心とする無差別爆撃(むさべつばくげき)のこと。これらの空襲で一般市民1万人以上が死亡したと言われている。

空襲警報
敵軍(ていきぐん)航空機による空襲を市民に知らせ、被害(ひがい)が出ないよう発令される警報(けいほう)のこと。ラジオやサイレンなどさまざまな手段(しゅだん)で伝達(でんた)される。

軍需工場
武器(ぶき)・弾薬(だんやく)をはじめとする軍需品(ぐんじゆひん)を、開発(かいはい)・製造(せいぞう)・修理(しゅうり)・貯蔵(ちよぞう)・支給(しきゅう)するための施設(しせつ)。

小学校に入學。4キロの道を通學しました。靴は無く、わら草履で、カバンも母の着物をつぶして、服と揃いで作ってくれた物でした。昭和20年8月15日終戦となりましたが、物の無い時代、畑を借りて野菜を作ったり、母の着物は米と交換したりで、両親は苦勞しました。大阪へ戻って勉強したいと2人の兄の説得で父も同意してくれて、門真へ帰って来ました。家を焼かれ、多くの死者を出し家族が路頭に迷い、虫けらの如く殺す戦争の悲惨さ！もう二度と戦争は絶対してはなりません。

堺大空襲の火中を逃げて

河内長野市 今村 早智子(83歳)

現在の堺区、阪堺線の宿院近辺に、私達二家族は、戦争当時住んでいました。昭和17年8月1日に、それぞれの家に女の子が生まれました。孝子と圭子です。二人は従姉妹どうし、孝子は私の3番目の妹です。

昭和20年7月10日午前1時半、焼夷弾の降る音で始まったのが堺の大空襲です。当時、女学校2年の私が驚いて家の外へ出たら、西の空は真っ赤でした。焼夷弾が雨のように降って、堺の旧市内は焼失しました。

我が家では、母が孝子をおんぶし、私が貴重品や先祖の位牌などを入れたりリュックを背に、妹や弟と共に開口神社へ逃げました。警防団員だった父と第一幼稚園で合流しました。父は自転車の紐で、1年生の弟を背にくくりつけ、みんなで境内の火の中を逃げました。

境内を大勢の人々と共に逃げ惑っているうちに、母の背に居た孝子は「熱いよう、お家へ帰ろうよ」と泣き出しました。後ろにおられた方が「お子たち火傷をしてはりますよ」と教えて下さいました。なんと左の脹脛に火傷を負っていたのです。一夜が明けて、市役所の救護

所にて、手当を受けました。

圭子の家は、我が家より西、通称「新天地」にありました。探しに行った母の兄が見たものは、圭子を含めた一家四人の焼死体だったのです。伯母の背での死、金歯で伯父とわかったとのこと、もう一人の従兄弟も勿論一緒でした。

圭子にはもう一人兄が居ました。沖繩で戦っていて、20年の秋にアメリカを経由して復員しましたが、帰ってきた堺に家族は居ませんでした。

我が家では、私のすぐ下の妹だけが、学童の集団疎開で家を離れていたもので、火の中をくぐりませんでした。

以上が二家族の戦争空襲体験です。二度と戦争をしてはなりません。

私の戦争体験

河内長野市 山口 康雄(77歳)

1938年5月、父の仕事の関係で朝鮮の平壤(現北朝鮮・ピョンヤン)で生まれた私は小学校1年生の夏休みの1945年8月15日に終戦を迎えました。学校での勉強の記憶はありません。行軍で体を鍛えておりました。

終戦直後にソ連軍が進撃して来て、家、家財を没収されました。家族5人、市内の日本人のお寺に逃れ、他の9世帯と共同生活を始めました。

食事はまともに取れず、糠を食べ苦しくて吐き出した事もありました。

38度線以南の南朝鮮はアメリカ軍が支配したため、日本人の引揚げ可能でしたが、ソ連軍支配の北朝鮮は自由に内地に引揚げられる事は不可能でした。引揚中に多くの日本人が殺されたとともに耳にした事がありました。

路頭に迷う
生活の道をなくし、住む家もなく、ひどく困ること。

位牌
死者の戒名(かいまよう)、法名(ほうみよ)を記した木牌(もくはい)のこと。

開口神社
堺市堺区にある神社。通称「大寺」。地元では「大寺(おおてら)さん」とよばれ親しまれている。

脹脛
膝(ひざ)から下、足首から上の部分のこと。すねの後方のふくらんだ部分。

復員
兵員の召集(しょうしゅう)を解除(かいじよ)すること。また、兵役(へいえき)を解(と)かれて帰省(きせい)すること。

行軍
部隊(ぶたい)が次の目的地に向かつて、自らの機動力(きどうりょく)で移動すること。

引揚げ
日本の敗戦まで、日本の植民地(しよくみんち)や占領地(せんりょうち)での生活をしてきた一般日本人が、日本本土に戻されること。

引き揚げの機会を伺いながら、終戦一年後の1946年8月の始め、集団生活を営んでいた寺を、夜二つそり離れ、トラック、貨車をチャーターして乗継ぎ38度線の境界で降りました。この峠を無事越える事ができたら、我々5人の命は助かるという父の言葉に励まされ黙々と約1時間歩き、無事に38度線を越える事が出来ました。親子5人抱きしめあって喜びあいました。この喜びは今も忘れる事はありません。寺を出て約1か月後の1946年9月1日九州佐賀の田舎に帰り着く事が出来ました。1年間の学校のブランクは有りましたが、2年生の2学期からの転入を許されました。私の戦争体験記は以上のとおりですが、両親、姉、兄、私5人が無事に内地に引揚げる事が出来たことは、これ迄の人生で最大の喜びであり、かつ幸せでありました。

不発弾で命拾い

富田林市 高浦 京子(85歳)

太平洋戦争が始まって小学校が国民学校と名前を変えた頃、私は大阪の都島区高倉国民学校の5年生でした。教室のすぐ横に土手があり、その上に貨物専用の線路がありました。その線路は吹田の操車場から大阪港まで続いていました。コトコトと列車の音がすると、目を上げて兵隊さんが乗っていないかと思えたものです。貨物列車でない時は、陸軍の軍服を着た兵隊さんが一ぱい乗っているの、これから戦地へ出兵して行くのだなど私達にもわかり、いつの頃からか窓に駆け寄って手を振るようになりました。兵隊さんの一人一人の顔もはつきり見える程近いので、兵隊さん達もちぎれる程手を振り返してくれました。

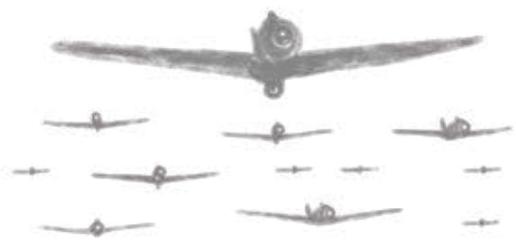
それから3年たった昭和20年3月から大阪にも空襲がある様になり、その貨物船を目がけて一トン爆弾が落とされる様になりました。その日は、勤労動員先の職場に着いたとたん警戒警報が鳴り、紀伊水道の潮岬から大阪に向かってB29の大編隊が来るという情報が入ったので、大急ぎで家に帰る事になりました。何とも不気味なB29の大編隊が迫ってくる音に追われながら、心臓が口から飛び出す程走ってやっとの思いで家にたどり着きました。家に飛び込んだ途端、B29の急降下のすごい音とともに、家が壊れるかと思う程の振動で次々と爆弾が落ちてきました。私の帰りを心配して待ってくれていた母と、ころげる様に裏の防空壕に入りました。防空壕といっても家の裏は土を掘るとすぐ水が出てきて溜まるので、その水の上に板を渡し、まわりを板で囲って上に土を乗せた簡単なもので、爆弾が落ちる度に身体は放り上げられ、溜まった水が天井にぶつかって土と一緒に落ちてきて生きた心地がしませんでした。しばらくすると物凄い音と衝撃で壕のすぐそばに焼夷弾が落ちてきて、もうダメだ、と覚悟しました。しかしそのまま爆発は起きず、空襲が終わってこわごわ出てみると、豪のすぐ横に長さ2mの焼夷弾が横たわっていました。不発だったおかげで母と私は命拾いをしたのです。

昼だというのに、あたりは薄暗く黒い雨がふっていました。そしてあちこちから火の手が上がり、消火も追いつかず、今朝まで歩いてきた道に炎が走り、風下の家々は次々に燃えてゆき、一瞬で火の海になりました。そのすごさといったら何にもたとえようもありません。人々は逃げ惑い、まさに阿鼻叫喚となり、火傷で皮膚をぶら下げた人や怪我をした人々が放心状態で、フラフラと鐘紡の病院を目指して集まってきました。私はその人達にお水をあげるのが精一杯で、自分が無事なのが不思議なくらいで、身体の震えが止まりませんでした。翌日やっと火がおさまり、もう焼ける物もなくなり、熱い地面の道端にはむしろをかけた人々や馬の死骸があちこちに横たわっていました。市電の停留所からはそれまで遠くで見えなかった大阪城が石垣の部分からすべて見えてびっくりしました。不思議な事に貨物線の線路には爆弾は落ちていませんでした。避難場所になっていた城北公園では、グラマンという飛行機の機銃掃射でたくさんのおんなの人や子供達が亡くなりました。今では公園の一

内地 一国(いっこく)の領土内(りようどない)の土地。国内。ここでは、日本国内という意味。

不発弾 戦時中、航空機から投下された爆弾が爆発せずに残っているものこと。

大編隊 多数の航空機が、ある隊形(たいけい)を一定に保ったまま飛行すること。



阿鼻叫喚 悲惨(ひさん)な状況になって、混乱(こんらん)して泣き叫(なき)ぶこと。

機銃掃射 機関銃の銃口(じゅうこう)を動かしながら、敵をなぎ払うように射撃(しゃげき)すること。

隅に仙人塚として祀られています。

大阪の街が焼野原になり、田舎のある者は疎開してもいいということになったので、私は父を残し私の故郷である懐かしい石川県に帰りました。女学校の編入試験は教育勅語の筆記でした。女学校では机の上で左右号という飛行機の部品を作り、小高い山を開墾してさつまいもを植える日々でした。日に日に食料がなくなり、栄養失調で身体がだるくてだるくて歩くのもやっとの思いでした。せっかく田舎に帰ったけれど、だんだん食料を分けてくれる人もなく、疎開した人達は随分ひどく情けなくやしい思いをしました。そして敗戦。ギューギュー詰めめの汽車で大阪に帰りました。大阪駅は家を失った大勢の人であふれかえり、思わず息を止めたくなるようなひどい臭いがたちこめていました。今も鮮明に思い出されます。

軍国主義真つ只中の日本で小学時代を送った私は、日本は神国でこの戦争は正義のためと信じていたのです。教科書で習った「ススメススメ、ヘイタイサン、ススメ」の兵隊さんはどこに進んでいたのでしょうか。自分達は被害者であると思っていたのに実は加害者になっていたとは…。数えきれない程の人々の命を奪った戦争、若者達の夢ある将来を奪う権利が一体誰にあるのでしょうか。人と人が殺し合う戦争が正当化される理由など決して有り得ないのです。

今思うことは、国の進路が一番大事なことです。そして二度と戦争はしない！爆弾や焼夷弾の落ちてくる下に子や孫を置きたくない！若者を死の戦争に行かせたくない！ということなのです。切なる願いです。

一杯の牛乳 疎開先で

高浦 京子(85歳)

昭和二〇年

それはカンカン照りの夏の日だった。

母と2人防空頭巾と袋を肩にかけ歩いていました。

ある農家の小屋の入口の桶にまっ白い塩が山盛りでおいてあった。

思わず走り寄って、なめてみた。しょっぱかった。

少しだけもらってもいいかしら、上衣のポケット、

モンペのポケットにつめた。

疎開した私達には塩はなかった。一升びんを2本さげ

2里あるいて、日本海で汲んだ海水を使っていた。

うれしくて、母とにっこり

そしてことわられるのがこわくて

だまって、足早に道を急いだ。

そして2人は突然胸が悪くなって吐いた。何度も何度も

そして母は思い出した。

それは肥料のアンモニアであると。

近くになっているトマトを思わず一つ食べた。

そして、海近くの墓へおまいりし親類の家へ寄った。

教育勅語
明治天皇により、教育(きょういく)に関して与えた勅語。以後の大日本帝国において、政府の教育方針(きょういくほうしん)を示す文書となった。第2次世界大戦前の日本の教育の根幹(こんかん)となった。

開墾
山野を切り開いて農耕(のうこう)できる田畑をつくること。

軍国主義
軍事力(ぐんじりょく)によって国威(こくゐ)を誇示(こくせ)し対外的(たいてい)に発展(はつぽん)することを国家(こくか)の最も重要な目的(もく)と考(かんが)え、政治(せいじ)・経済(けいぎ)・法律(りっぽう)・教育(きょういく)などの構造(こうぞう)や国民(こくみん)の生活(せいかつ)・思考(しこう)様式(ようしき)・しこう(じゅうぞく)を軍事力(ぐんじりょく)強化(きやうか)に從属(じゅうぞく)させ、これに奉仕(ほうし)しようとする主義(しゆぎ)。

防空頭巾
空襲(くうしゅう)の際(とき)に飛来物(ひらいぶつ)や落下物(らつかがぶつ)から頭部(かぶ)を守るためにかぶった綿入れ(わたいれ)の頭巾(かぶ)。



牛を二頭飼っていて、牛乳を一杯いただきたいと頼んだ。その家の主人はけんもほろろに険しい顔で、牛乳は軍へ供出してゐるから一杯もやれんと叫んで、人を追い払うように手をふった。私は栄養失調で歩けない状態だった。母は怒って、もう縁を切ると言った。私は悲しかった。

そして数日後、玉音放送があつて日本は敗れた。

母はその後死ぬまで絶対にその家へ寄りなかつた。なつかしいふるさとなのに。

○学徒動員の思い出

堺市 奥山 幸子(86歳)

大東亜戦争の最中、昭和19年11月5日に女学校の3年生だった私達は、愛媛県より尼崎の軍需工場へ学徒動員されました。まるで出征兵士のように見送られ、まだ本土への空襲もなかつたので、あまり不安も感じないで、百名程の同級生と付添いの先生共に工場の寮に落ち着きました。作業着や戦闘帽が配られ、翌日より機械を使って油まみれになりつつ内燃機を

作る仕事が始まりました。工員さんや挺身隊の女性、男女の学徒等、黙って働いています。食糧不足も深刻で、豆粕入のご飯が軽く盛られ、むかごややし、漬物等の粗食、寮に帰って、家より送って貰ったはったい粉やいり豆等を食べつつも、いつも空腹でした。薄く冷たい寝具で、やがて冬に入り、火の気のない生活でしたので、忽ち霜やけが出来て仕事を休まないといけない日もありました。交替で1週間の帰郷があり、特に霜やけのひどかった私は、2週間休んでくるよう言われ、すっかり快くなつて再び仕事に励みました。やがて、大阪神戸と空襲があり、南の島の玉砕のニュース、二度と帰郷出来なくなるので、不安に涙することもありました。6月15日のこと、空襲警報にいつものように瓦屋根の防空壕に入り、しばらくして突然屋根を突抜けて入口附近に焼夷弾が火を噴いたのです。無我夢中でそれを飛越えて外へ。どうして垣根を越えたのかわかりませんが、隣の麦畑へ逃げ出しました。空を見ると焼夷弾は雨のように降ってきて、何人かの友人と神仏に祈りつつ、弾を避け、生きた心地もなく夢中でした。ふと見ると寮も燃え落ちています。やがて静かになり、集合しましたが、昼間なのに夕暮のようにうす暗くなつていました。全員怪我もなく安堵しました。焼け残った食堂でこげた雑炊を食べ、2、3日後、なすすべもなく帰郷することになりました。2か月後に終戦を迎えるわけですが、その間にも近くの市に空襲があり、夜空が真赤になりました。二度と戦争はありません。世界中から戦争を無くしたく思います。

供出

戦時体制下などで、政府が民間(みんな)の物資(ぶつし)・主要農産物(しゅよう)のうさんぶつ)などを一定の価格で半強制的(はんききようせい)に売り渡させたり、差し出させたりすること。

玉音放送

天皇の肉声(にくせい)「玉音」を放送すること。特に1945年8月15日正午、昭和天皇みずから太平洋戦争の終結(しゅうけつ)と日本の降伏(こうふく)を国民に告げるために、円盤録音(えんばんろくおん)によって行った終戦のラジオ放送のことを指す。

大東亜戦争

1941年の開戦から1945年の降伏調印(こうふくちゆういん)までの日本「大日本帝国」とアメリカ・イギリス・オランダなどの連合国(れんごうこく)との戦いのこと。

学徒動員

第二次世界大戦中、深刻(しんこく)な労働力不足を補(おぎな)うために、中等(ちゅうとう)学校以上の生徒や学生が軍需産業(ぐんじゅさんぎやう)や食料生産に動員(どういん)されたこと。

挺身隊

任務(にんむ)を遂行(すいこう)するために身を投げうって物事をする組織(そしき)のこと。

豆粕

大豆から油を絞(しぼ)りとった残りの粕。飼料(しりよう)や肥料(ひりょう)にする。

はったい粉

オオムギを炒(い)って挽(ひ)いた粉のこと。

戦時の兄の思い出

堺市 河田 千代美(89歳)

私は大正15年6月に、岡山県の瀬戸内海の小さな島、北木島で生まれました。小学5年生の時に支那事変が起きて、その時は何が起きたのかわからず、先生の教えに従って毎朝、氏神様へ武運長久をお祈りに参りました。その時の唱歌は軍歌ばかりで、私達も励まされました。

来る年も、来る年も戦時。学校では勉強のほか、ナギナタ、竹ヤリの練習、日曜日や休日には出征兵士の家へ勤労奉仕でした。野良仕事に漁業のお手伝いでした。

食べる物も充分なく、その時母に「兵隊さんの事を思へ」と諭されました。

次に大東亜戦争(第二次世界大戦)が勃発し戦況は次第に悪化し、男子は学徒召集で軍事工場へ行き、私達の小島は水上飛行機の練習場となりました。小さな島でも航空航路になっていたため、B29が時々強音を立てて、通り過ぎます。その回数も次第に多くなり、その度に父が作ってくれた防空壕へ16歳はなれた妹3歳を抱いて入り、音の止むのを震えながら待っていました。

或る夜、警報が鳴りおびえているところ、隣村へ焼夷弾が投下され、昼間の如くあたりが真っ赤に明るくなり、一体どうなった事かと震える事数時間。家を焼かれ、死傷者達がたくさん出たこの事。それは恐ろしい大変な事でした。

段々と戦争も悪化して来ており、その頃満州より沖縄へ私の兄は従軍していました。父母と共に武運をお祈りしていましたが、敵軍の攻撃にて昭和20年6月23日に戦死との公報が入り無念でなりません。昭和20年8月15日終戦。早く終わっていただくと残念に思うばかりです。

兄が満州より沖縄へ従軍の時、遺書を送って来ました。今でも思い出しては読んで、感動

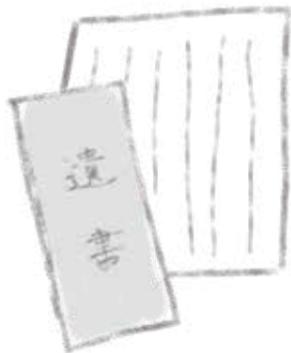
しており、20歳の時にこんなに立派に、国を思い親、兄弟、妹を励ましてくれたのかと尊敬しています。こんな心強い男子達を、無残に死なせた戦争はもう二度と起きてはならない、起こればいけない。世界平和を呼び起こしたいです。

追伸 戦時の兄の思い出を語り継いだや老心。

はなせぼうひこうえん
花瀬望比公園(鹿児島)



B-29



支那事変
1937年から始まった、日本と中華民国の間で行われた長期間(ちようきかん)かつ大規模(だいきぼ)な戦闘。両国とも宣戦布告(せんせんぷこく)をしなかったため、「事変」と呼ばれる。

武運長久
武人(ぶじん)としての命運(めいいうん)が長く続くこと。また、出征(しゅつせい)した兵がいつまでも無事なこと。

戦時教育と食糧難時代の銃後の少女

堺市原口 尅江(81歳)

私は昭和16年に京都市左京区の北白川国民学校に入学しました。両親と10歳離れた姉と2人姉妹でしたが、姉19歳の時(昔は数え年でした)、女子挺身隊に取られないうちにと、河内長野に住んでいた又従兄25歳と結婚することになり、姉婿は婿養子となってくれました。そして家族全員で疎開する形で河内に引越しました。現在の「花の文化園」のあたりでした。

しばらくして義兄に赤紙が来て戦地へ。昔の名称では中支(中国)へ出征していききました。父は若い頃、酒好きだったせいで昔の病名で「中風」になりました。病人をかかえての生活は苦しく物資も乏しく、私は山に磨砂が出るの聞いて、石けん代わりに体や顔を洗っていたら肌がすりむけて顔から血が滲んで泣いていました。姉が「ひと皮むけたん違うか」と膏薬を塗ってくれました。話は前後しますが、私は4年生で河内の高向国民学校に転校しました。校門を入ったら先ず「二宮金次郎」の銅像に最敬礼をしてから教室に入りました。特に修身の勉強では「父母に孝・兄弟に優に」と全員起立して暗唱させられました。また、手旗信号の文字も紅白の旗を振って覚えさせました。そしてニホンの国と言ったら先生からきつく叱られました。理由は弱々しく聞こえるので「ニッポン」と言えと注意を受けました。男の先生でさびしく足には、いつもゲートルを巻いておられました。そして日本列島の地図を黒板にぶらさげて、千島列島から沖縄までの地図を棒でなぞらせて弓道の形をしているので、このような形状は正に神の国なので必ず神風が吹くから負ける事はないんだ、と教えられました。生徒達はみんな先生の言ってる事を信じてました。そして「撃ちてしまん、勝つ迄は欲しがりません」を合唱してました。

また、父が愛用していた銀のキセルや金属類は兵器にするのでと通達があり供出させられました。もし隠したら憲兵隊が来て罰せられると言われました。父は若い頃、京都で友禪染の職人だったので「京の着倒れ」と言う位に姉には着物を沢山作ってくれていたのです。しかし、その着物も全部農家に持って行って米や麦に替えて私達を養ってくれましたが、もう交換する物もなくなり、朝起きても食べる物がなく裏の空地で作っている玉ねぎ1個をスライスしたものを配給の正油の素(キャラメルのような固形物)を溶かして、それをすすって学校に行きました。学校帰りに1人になり空腹で歩けなくなり道端のよそ様の畠に座り込んでナスビをむさぼって食べました。家に帰り、口の周りが紫色になっているのを見られ怒られた事もありました。配給があると聞いて行けばサツマイモ、それも鋏切れのイモが殆どで、今のようなホクホク感などないイモでしたが、そのイモで飢えを凌いでいました。

昭和20年8月15日、やっと終戦というより敗戦、私は国民学校6年生でした。そして21年4月に中支より義兄が復員してきました。突然「ただ今」の声で飛び出して行って、うれし泣きました。そして義兄が背囊の中から持ち帰ってくれた支那米を出してくれました。初めて見る支那米は細長く日本の米より3ミリ程長く、炊くとねばり気はあまりなかった様に覚えております。お米のご飯をお腹一杯食べられたのが今迄で一番うれしかったです。病気の父もこの支那米をお腹一杯食べさせてあげられましたが、寝込んで3年で64歳で義兄が復員して来たのを見てから亡くなりました。現在は飽食時代でまだまだ食べられる食材が捨てられているのが現状です。それを見て出る言葉は「勿体ない」です。

冒頭の書き出しに私は昭和16年に国民学校に入学しますが、この年の12月8日に日本は真夜中に真珠湾に停泊中のアメリカの軍艦に奇襲攻撃をかけたのが太平洋戦争の始まりでした。そして大東亜戦争に発展していつて何拾万人もの戦死者を出したのです。日本は侵略戦争をしたのです。そのために当時の為政者は戦争犯罪人として絞首刑や割腹自殺等をして過去の太閤を自らの命で償ったんです。義兄の兄は戦艦大和で、また私の主人の兄も空母瑞鶴の船で戦死しました。私自身は爆撃や逃げ惑う事はなかったのですが、このように食うや食わずの戦中派も居たことを後世の人達に残しておきます。

銃後 戦場の後方(こうほう)。前線(ぜんせん)ではなく、後方に残された一般国民のこと。

中風 脳出血(のうしゅつけつ)・脳梗塞(のうこうそく)の後遺症(こういしょう)で、運動機能障害(うんどうきのうしようがい)でしびれや片麻痺(かたまひ)や言語機能障害(げんごきのうしようがい)をきたす状態のこと。

磨砂 金属製の器物(うつわもの)を磨くのに用いる凝灰岩質(ぎようかいがんしつ)の砂。歯磨(はみが)き粉としても用いられた。

膏薬 あぶら・ろうで薬を練(ね)り合わせた外用剤(がいようざい)。皮膚に塗ったり、紙片または布片に塗ったものを患部(かんばん)にはりつけたりして用いる。

憲兵隊 大日本帝国陸軍において陸軍大臣(りくぐんだいじん)のもと、軍事警察(ぐんじけいさつ)としての任務を行う兵科区分(へいかくぶん)の一種。

為政者 政治を行う者のこと。

戦艦大和 大日本帝国海軍がつくった史上最大(しじようさいだい)の戦艦のこと。

空母瑞鶴 大日本帝国海軍の航空母艦(こうくうぼかん)「飛行甲板を持ち、航空機運用能力(こうくうきうんようのうりよく)を持つ艦船(かんせん)」のこと。



平和のありがたさをかみしめる

東大阪市 寺井 見一(82歳)

響き渡るサイレンの音、警戒警報発令、空襲警報発令、逃げなければならぬ。不安におびえ、子を心配する母の顔が忘れられない。

戦局がびしくなり集団疎開、昭和19年9月16日、当時小学校ではなく国民学校初等科といい、初6男子30名、初3女子20名は大阪駅から夜行の専用列車で石川県粟津に出発した。寺院での寮生活、燃料として松葉、松かさ集め、農家に行き、わらでつくる雪用のわらくつをつくるため、わら打ち作業は帰寮後の日課だった。学校へは15分、ゴムが軍需品のため長靴は無く、雪道を裸足で走って登校、冷えた足を木の床でこすりあたためた。6キロ離れた市内へ米俵を受取るためわらくつをはいて、雪道に使う木製のソリでの運搬作業はきつかった。20年3月帰阪、国民学校の卒業式は大空襲で中止、幸い自宅は爆撃から免れた。中学(旧制)入試、混乱状況の中、落ち着いて筆記試験できる状態ではなかった。体操のみ、全員合格だった。入学後、年少のため、勤労動員、特攻隊志願はなかった。成績上位者には担任から陸軍幼年学校受験の指名があった。20年6月7日、米軍機の襲来で上六にあった中学から都島の家を目ざして走ったが、突然低空飛行で機関銃の掃射を浴び、地面に腹ばいに伏せ息をひそめ去るのを待ち助かった。自宅付近は焼夷弾で壊滅。国民学校講堂でやっと両親に合流した。城北公園では多数の爆死者遺体の焼却作業、穴掘りが行われる悲惨な数日が続いた。

東大阪に居を移した。終戦、食糧難、中学での授業は午前中に一時間程度、あとは農作業で学校近くの焼跡を畑にしてサツマイモをつくる食糧生産の日々が一年近く続いた。子供達の健やかな成長を願うとき、戦争はノー。

「敵をつくらない」こと。列島にある原発、これは非常時には危険かつ巨大な爆薬庫にもなる。情報、科学の進歩、GPSで人の動きまでわかる時代、戦争になればもはや列島には集団疎開できる地すらなくなるのが現実である。戦中、頭に刷り込まれた宣撫の歌を忘れない。「パーマメントに火がついて、みるみるうちにはげ頭、はげた頭に毛が3本、ああ恥ずかしや恥ずかしや、パーマメントはやめましょう」これが70年前の事実だったのです。

小学3年生集団疎開

富田林市 新宅 やす子(79歳)

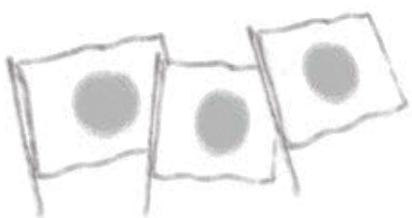
四国香川県へ、見送る日の丸は波打っていた。わからぬままお寺に着いた。不安の中、一人泣き出すと皆んな大泣き。布団は自分で敷き衣類は着る順に重ね、お父さん、お母さん、おやすみなさい、大阪に向かって全員で言う。夜中のトイレは起こされる、おねしよをしないように、洗面は一列に並び井戸水を汲む。つるべの使い方で水をすこししか汲めなくても、工夫して使う。食事は全員で手伝い、おやつは豆か干芋。風呂は週一回、村の男湯に入る。夜は紙芝居幻灯等見せてくれる。

4年生になり、常徳寺へ。広くて庭が美しい。海も近く、塩田は広い。潮が引くと、細い流れに残った魚等手づかみでとり、走り回る。青空の下で、喜々と遊ぶ。楽しい！帰りは漁場でバケツに何杯も買って、奥様と帰る。夜隠居様から肩たたきのお呼び。上手上手とごほうびを頂く。祖母の肩たたきをしていたので、お手のもの。担任は男の先生で、唄好き、私はレコード係となり、今も影響を受けている。

8月15日終戦。5人残り、帰って行った。淋しく話も笑いもなくなった。木枯の吹く頃、父母が迎えに来た。母は顔全体包帯でぐるぐる巻き、大阪も焼夷弾、爆弾で全焼。焼け野原となった。やっと大阪に着いても電車もなく、何時間も歩き、父の苦心のバラックに着いた。

陸軍幼年学校
幼年時(ようねんじ)から幹部将校候補(かんぶしょうこうこうほ)を育てるために設けられた、陸軍の全寮制(ぜんりょうせい)の教育機関。

宣撫
占領地で、占領政策(せんりょうせいさく)の目的・方法などを知らせて、人心(じんしん)を安心させること。



もう戦争はいやです

堺市 匿名(85歳)

電気、水道、畳等ない。学校も焼けてない。焼跡を片付け、島を耕す毎日。至る所に焼夷弾の殻があり、爆弾の落ちた大きなすり鉢の穴等、爆弾のすさまじさを感じました。幸い全員無事だったので、一生懸命復興へと立ち向かいました。何十年後、家族で疎開先へお礼に行きました。寺は寂れ人影もなく、塩田は工業地帯に変わっていました。

私は昭和5年産まれです。東京の豊島区の日の出町という所で昭和20年3月10日の夜にB29という飛行機が1機飛んできて照明を明るくして玉を落としていきました。15分程してまた同じ様にして30分程続いて、また10日間程いて同じ事をくりかえしていき、まったくの焼け野原になりました。近くのお寺に、それも家はありませんので青空の下で一日過ごししました。母と姉と私と弟と4人で母の姉のところへ一時お世話になり、その所から今度は姉の会社が大阪の西宮に工場がありましたので、そこでお世話になっておりましたが、大阪もだんだん戦争がはげしくなりました。ここにおっちはあぶなくなり、鳴尾の飛行場に爆弾を落として行った時には、母と兄弟で家がすくばく風でゆれて、もうこれでおしまいかもしれないとみんなでだき合ってわあわあ泣きました。

東京の家は30分で焼きくずれてしまい、何も出すひまがありませんでした。それはそれは口では言いあらわせない様なありさまでした。私はその時16歳くらいですネ。それでも東京の学習院下の軍事工場に頭に「必勝」と書いたはちまきをしめて、学校の先生共々働かせられました。食事といっても天井に見える様ななに入っているのやら分からないおかわりみたいな物を食べさせられました。その時にラジオから流れた曲が並木みちこさんの赤いリンゴの歌が流れた事をおぼえております。私が男であったなら零戦に乗って行ったかもしれない。もう涙が目から出てきてしまい、何とも言い様がありません。もう母が66歳で亡くなり弟が72歳で亡くなり姉2人も25年に亡くなり私1人になりました。今でもマンションで1人で暮らしております。主人も平成5年に亡くなりました。お陰様で85歳になりますけれど、ひぎも腰もなんともなく元気で自分の事はみんな1人でやっております。

もう戦争はぜったいやってはいけません。
 どんなことがあってもいけません。
 どうか宜しくおねがいます。



原爆の子の像[広島平和記念公園(広島)]